

スウィート シークレット
Sweet Secret
Sbiori & Takabiro

栢野すぼる

Subaru Kayano

ernity



エタニティ文庫

目次

Sweet Secret 5

書き下ろし番外編
ママになっても書いています。 339

Sweet Secret

プロローグ

眼下がんかに、星屑ほしずを振りまいたような光が揺れている。

ここは、都内でも屈指の一流ホテル。その最上階に位置するフレンチレストランだ。リザーブされた特別席には周囲の喧騒けんそうはほとんど届かず、まるで幻想的な世界に二人きりでいるかのような気分になれる。

——き、緊張する。今日、されるのかな、アレ……

ふるわしおり
古河詩織、二十五歳。

今日は婚約者の孝弘との、五年ぶりの再会である。

五年もの間、アメリカに赴任していた孝弘は多忙で、めったに日本に帰ってこられなかった。こんなふうに関を合わせて会話をするのは久しぶりだ。

目の前の孝弘は、五年前よりも、はるかに男らしく頼りがいのある雰囲気をもっている。清潔感と自信に溢あふれた彼の佇たふすまいが、詩織には眩まぶしく感じられた。

——どうしよう。孝弘さん、ますますかっこよくなつて帰ってきた。私との釣り合わ

なさがより明確になつて……！

日本有数のゼネコン、古河重工ふるかわじゅうこうの創業者一族の長女詩織と、金融系企業を多数傘下さんかに置く小早川グループの後継者である孝弘は、婚約関係にある。二人が幼い頃に親どうしが決めたのだ。

だが、気品溢あふれる美青年の孝弘の前に、詩織は正直、萎縮いしゆく気味だった。

細身だが鍛きたえ上げられた体に、優雅で意思の強そうな眼差し。つややかで滑らかな肌と、わずかに栗色を帯びた薄い色の髪。孝弘はどこからどう見ても理想の王子様そのものの容姿をしている。いや、彼は容姿だけではなく、性格も頭脳もパーフェクトなジェントルマンなのだ……

思えば幼稚園の頃に引き合わされたときから、五つ年上の孝弘は完璧な『婚約者』だった。どちらかと言えば抜けている詩織にイライラすることも山ほどあっただろうに、決して嫌な顔をせずに、ずっと優しく接してくれた。詩織は、彼に微笑みかけられれば舞い上がり、デートに誘われれば必死でお洒落しゃれをして出かけたものだ。

そう……孝弘のことはとても好きなのである。嫌いになる要素などない。

彼は女の子なら誰でも憧れてしまうような男性なのだから。でも……詩織は彼に気づかれないよう、窓に映った自分の姿をそっと確かめた。

やや小柄でおとなしそうな女が、ガラスの向こう側から自分を見つめ返してくる。

——私、変な格好じゃないよね？

アクセサリーはパールで統一し、靴もドレスに合わせた濃紺のサテンの九センチヒール。このレストランにいても問題ない服装だと思っただが、孝弘の目にはどう映っているのだろうか。

孝弘は、いつも万事にそつがない。婚約者である詩織のことも、無難に『可愛くて面白くて俺の好みだ』なんて言ってくれる。

『面白くて』という部分に『他に褒めようがない』という孝弘の気持ち^ヒが滲み出ているようで若干切なくはあるが……詩織は、彼の言葉を好意的に受け止めているつもりだった。

もちろんそうして褒めてくれるのは、詩織の両親に配慮してのことだろう。

実際の詩織は、美人の母に似てそここの顔立ち^ハはしているものの、はっきり言って地味な人間である。

さらに言うなら、生まれ育った実家の立派さはさておき、詩織本人は『お嬢様』という呼称に似合わず、かなり自由人なのだ。

親は詩織を、古河家のお嬢様にふさわしくあるようきちんと育ててくれたのだが、残念なことに詩織の自由っぷりは直らなかつた。

周りのお嬢様達が、ブランド品だのメイクだの他校の彼氏だのと、年相応の物事に興

味を示し始める中、詩織は一貫して自分の『趣味』に没頭する日々を過ごしてきた。それが、お嬢様らしからぬ振る舞い^ハにいつそう拍車をかけることになった。

そうして孝弘がいらない五年の間も、詩織はひたすらそれにのめり込んでいたのだ。ついには職業になってしまった『趣味』に……

——そっか、もう五年経っちゃったのか。私が孝弘さんと一緒にアメリカに行くのを断つてから。あつという間^ハだったな。私も仕事が忙しくて充実してたし。孝弘さんもそうなんだろうなあ。

そう思いながら、詩織はワイングラスに手を伸ばす。

今日の会食では孝弘が、詩織の生まれ年である二十五年前の赤ワインのボトルを開けてくれた。

『特別な日にしたいから、この年のワインを探してもらった』と言って。

特別な日、という言葉に、詩織の胸はさつきからドキドキが止まらない。

「五年前は渋いって言って、ワインなんかほとんど飲まなかったのにな」

孝弘がからかうような笑みを浮かべたので、詩織は冗談めかして膨^くれてみせた。

「もう大丈夫です。今は大好きになりました」

「そう。それなら、これからは一緒にワインを楽しめそうだ」

孝弘は機嫌良さげにそう言い、目を細めてグラスを傾けた。

詩織が微笑みかけると、孝弘が今までのくつろいだ雰囲気を変え、姿勢を正した。

「あの、詩織」

孝弘が意を決したようにグラスを置いて、懐（ふとろ）から何かを取り出した。彼の喉（のど）が、一瞬（みづか）ぐくりと上下する。

「左手を出して」

孝弘の言葉に、詩織の心臓（こころ）が躍（おど）り上がった。言われるままに差し出すと、孝弘は緊張した表情で告げる。

「サイズは君のお母さんに相談して、見当をつけてもらったんだ……ああ、びったりだ」

詩織の左手の薬指（かみゆび）に、零（こぼ）れ落ちそうなほど大きなダイヤの雫（しずく）を飾り、孝弘がほっとしたような表情になる。

「似合うな。やっぱり君の肌には桜色が映える」

「孝弘さん……この指輪……」

詩織の指に輝くのは、美しいエンゲージリングだった。小豆大（あずき）の見事なクリアカラーのダイヤモンドを、大粒のピンクダイヤが取り巻いている。まるで、泉の周りに咲き誇る満開の桜のようだ。大ぶりの石達がダウンライトの光を撥（は）ね返し、虹色にきらめいていた。

——こんな大きなピンクダイヤ見たことない……色も粒の大きさも全部揃（そろ）ってる……。ひよっとしなくても、普通のお店には出回らないクラスのすごい石よね……

緊張の面持（おも）ちで孝弘を見上げると、彼は端整な顔に、透き通るような優しい笑みを浮かべた。

「バイヤーにこのダイヤを見せてもらったとき、これなら詩織のイメージに合う指輪が作れると思ったんだ。よかった、すごく似合う」

「私のイメージ……ですか？」

「この桜色。君は昔から桜の花みたいな人だったから」

自分のどの辺（へだ）が桜なのかな？ と真面目に考え込んだ詩織の手を、孝弘が大きな手で握り込む。

「やっと落ち着いて、君と日本で暮らせるんだな。五年前は振られたけれど、腐（く）らずに頑張（がんば）ってよかった」

「あ、あのときはすみません、あの……」

「詩織、俺（おれ）と結婚してくれ。もう五年経（か）った。今度こそプロポーズを受けてくれるだろう？」

形の良い目に甘い光を宿し、笑顔でそう告げる孝弘に、詩織の胸（むね）がとくとと高鳴（たかね）った。

——イ、イケメンのそういう笑顔は、反則（はんじやく）です……！

五年前、まだ二十歳だった詩織は、アメリカへ赴任する孝弘との結婚を先送りにして、日本に残ることを選んだ。

まだ結婚には早いからという口実で断ったのだが、本当の理由は孝弘に言えなかった。……まあ、言えるわけがない。

『私、昔から隠れてエッチな小説を書いていたんですけど、このたび有名な女性向け官能小説のレーベルからデビューが決まったんです。だから駐在エリートの奥様にはなりません！ 日本でエロ小説家として頑張ります！ 孝弘さんも頑張ってくださいい！……なんて。』

書籍化の打診が来たとき、ちょうど海外赴任が決まった孝弘からプロポーズを受けた。まさか、短大在学中に出版社に送ったエロ小説が、本当に商業出版されるなんて思ってもみなかったのだ。

だがそのために、詩織は彼のプロポーズを断った。どうしても小説家になりたくて。手に入れたチャンスを逃したくなくて……

『まだ二十歳で、海外で孝弘さんの奥さんとしてやっていく自信がないから』というもつともらしい理由を述べたので、強く結婚を希望していた孝弘も、一応は納得してくれた。

しかし、今や結婚を断る理由などない。孝弘はこれから日本で暮らすことが決まって

いるし、詩織の年齢的にもちようどいい。

——い、いや、大丈夫、シミュレーションどおりに進めれば、『私の仕事』のことは絶対に内緒にしておけるはず！

詩織は内心拳を握りしめつつ、自分にそう言い聞かせた。

もしも、自分がプロの官能小説家であることがバレたらどうなるのだろう。

『そんなイロモノの嫁はいらん！』と、両家を巻き込んだ婚約解消騒動になるのだから。

金融系大企業のオーナー一族である小早川家は、超！ お固い家柄だ。詩織の職業は毛嫌いこそされ、歓迎されるはずもない。

想像していくうちに青ざめてきた詩織の顔色に気づいたのだから、孝弘が声を曇らせて尋ねた。

「もしかして嫌だったか？」

「あつ、いえ、そんなことないです。このダイヤ、本当に桜みたいな色で綺麗だなあつて……」

上の空だった詩織は、慌てて笑顔を作った。

「俺との結婚の話は受けてくれるんだな」

詩織は、笑顔のまま孝弘の言葉に頷いた。

「はい……お受けします……嬉しいです」

こんなふうな素敵な場所で、誰もが見とれてしまうような美青年にプロポーズされたら、嬉しいに決まっている。

領きながら、とうとう自分もお嫁に行くのだな、と詩織は思った。

毎日、寝ても覚めてもエロ小説のことしか考えていない自分にもこんな日が来るのだと思うと、感無量だった。

頬を染める詩織を、孝弘が幸せそうな笑顔で見つめる。

「詩織は俺のことが好きか？」

「は、はい！」

反射的に頷くと、孝弘が笑顔のまま言った。

「俺もだ。そう言ってくれて本当に嬉しい。これからも、君を一生大切にする。君にふさわしい男になれるように、五年間アメリカで頑張った甲斐があった」

官能小説のヒーローがヒロインに囁くような、完璧すぎる愛の言葉だった。

こういう言葉がサラリと出てくるからエリートイケメン御曹司は怖いのだ。

極上の笑みを浮かべる孝弘と見つめ合いながら、詩織は今日この時間まで何度もシミュレーションした内容を、あらためて頭の中で復唱する。

——大丈夫……よね……？ 著者用の見本誌は今後、時間指定で孝弘さんのいない時

間に届けてもらって、届いたら貸倉庫に片付ければいいわよね？

詩織はプロの小説家として、短大を出た頃から、つごう二十作の女性向け官能小説を上梓している。現在は、中堅どころの筆の早い作家としてそこそこ重宝されている立場だ。

そんな詩織には、出版後、自著の見本誌が贈られてくる。

出版社にもよるが、著者に贈られる見本誌の冊数は概ね十冊ほど。

つまり今、詩織の家には、自分が書いた官能小説が二百冊近く積み上がっているのだ。今年は五作ほど出版の予定があるので、さらに五十冊は増える予定である。

まさか孝弘のもとに、自分の書いたエロ小説数百冊とともに嫁ぐわけにはいかない。

だが、見本誌は自分の努力の成果なのだから、愛着が深くて捨てるには忍びない。それにこれらは、他社の編集部に営業をかける際の名刺代わりにもなるのだ。

もう一つ、悩んでいることがある。執筆中の文章を孝弘に読まれるのはまずい、ということだ。

詩織が手がけている小説は、官能描写に免疫のない人であれば、見た瞬間に『ウツ』となるほど濃厚なエロシーンが多い。

孝弘に、『詩織はどんな原稿を書いているの？』なんて気軽に覗き込まれたら一巻の終わりだ。原稿にはひと目でわかるほど、エロい単語がぎゅっちり詰め込まれているのだ。

から。

「詩織、どうした？　なんだかさつきから少し元気がないけど」

真顔になった詩織の様子に気づいたのか、孝弘が表情を曇らせた。

「なっ、何でもありません」

「それならいいんだけど……ところで新居はどこにしようか。目白はどう？　君のご実家にも近いし。あのあたりに新築のマンションはあるかな」

——うちの近所に住むの？　まずい、あのあたりに貸倉庫やレンタルオフィスはあつたかしら？

慌てて考えを巡らせる詩織の前で、孝弘が楽しげにワイングラスを傾ける。

「早く二人で暮らしたいね。式の前に籍だけ先に入れたら、君のご両親に叱られるかな」

しかし詩織はそれどころではない。

「あの、孝弘さん、す、住むのは、貸倉庫のある街がいいなって……あと、レンタルオフィスなんか近くにあったらいいかも。私、今、フリーライターだから……」

「いや、そんなもの借りなくていいよ。新居を広めにしよう。そこに詩織用の書斎を作ればいいじゃないか。まずはマンションを借りて、都心にいい土地を探そう」

その答に、詩織は一瞬気が遠くなる。

——どうしよう……私の計画が、孝弘さんの財力で一掃いっそうされてしまう！　この金持ちめ……！　お願いだからそんなに張り切らないで……

孝弘は新居のことを考えるのが嬉しいらしく、明るい声で話を続けた。

「どんな書斎がいいかな。吹き抜けにしようか？　君が気分よく仕事に集中できるように、明るいスペースが良さそうだ」

せっかくなのご提案に申し訳ないのだが、そんなに明るい場所でエロ小説を書きたくない。

許されるならば、こたつなどで背中を丸めてお茶をすすりながら書きたいのだ。

「書斎はいらないですよ？　レンタルオフィスを借りますから」

「遠慮しなくていいよ。一緒に設計しよう。色々考えるのも楽しいし」

「いえ、遠慮とかではなく、本当に……一人でひっそり書きたいっていうか……」

孝弘は、詩織が結婚後も仕事を続けることについて、一切反対しなかった。実家の両親は、若くして要職に就く多忙な孝弘に気を使い、詩織に専業主婦になるよう言うてるが、孝弘はそれを『詩織の自由にしてほしいし、仕事をしている女性は好きだ』とこばってくれるくらいだ。

孝弘は昔から詩織の意思をとて尊重してくれる。その気持ちはありがたいのだが……

「わ、私、物が多いから……収納が……貸倉庫が、ある所がいいな……」
嘘をつき慣れていない詩織は、あつという間にしどろもどろになってしまった。
だが、あれら筆舌に尽くしがたい内容の自著を家に持ち込むわけにはどうしてもいかないのだ。真面目な彼にあんな汁だくの文章を読まれたら……全てが終わる。
「収納なら、新居に広めのウォークインクローゼットをいくつか作ればいいんじゃないか？」

当然のように提案してくる孝弘に、詩織は心の中で叫んだ。

——ダメ！ そのクローゼットに、貴方がウォークインしてきたら困るの！

旧小早川財閥の御曹司、今では小早川フィナンシャルグループの最年少役員として名を馳せる孝弘は、日本の若手の中では名実ともにトップクラスのビジネスマンである。

趣味は剣道とジョギングとスキー、語学は英語と中国語に堪能で、この五年の間に海外の超一流ビジネススクールで経営系の難関資格も取得しているらしい。

そんなエリートかつ理想の王子様像を体現したような孝弘の前に、『姫様、今宵は三人で楽しみましょう』『あつ、そんなところに指……ダメ……』『いやらしい身体だ、こんなに溢れさせて……』などという文章をさらけ出す勇氣は持てない。持てるわけがない。

詩織は、自分が官能小説家であるということをも、ごくごく一部の人間にしか言っていない。

ない。

過保護な両親には、フリーライターの仕事をしていると説明している。

古河重工、及び多くの関連会社のトップに立つ多忙な父は、娘の仕事にはさして興味がないらしく、『詩織は国語が得意だったから、作文を仕事にしているんだらう』などと適当な解釈で済ませている。名家のご令嬢だった母は世間を知らないもので、詩織の仕事も『お友達に頼まれて、何か書いてお金をもらっている』と理解しているようだ。

おかげで、今のところは何とか、家族にバレずに済んでいる。

唯一、身内バレが危ぶまれるのは七つ年上の兄・章介だが、クールな兄は妹の自由を尊重してくれるので深く詮索してこない。さっぱりした性格の兄で、本当に助かっている。

短大を卒業したあとは、仕事に集中したいからと父が所有するマンションで一人暮らしも始めた。

もちろん大反対されたが、孝弘と結婚するまでに一人暮らしくらいは経験させてくれ、と押し通したのだ。

だが、一人暮らしを希望した理由は、本当のところ一つしかない。

エロ小説を書きたいから。そして、エロ小説を書いている姿を家族には絶対に見せられないからである。

別にこの仕事を恥じているわけではないのだが、自分が書いた本気のエロシーンを親兄弟に読まれて平気かと言われるとノーだ。詩織はそんな豪傑ごうけつではない。ただの平凡なエロ作家だ。

「詩織、どうしたの？ ワインを飲みすぎた？」

孝弘の言葉に、今後の対処法について考え込んでいた詩織は、慌てて笑みを浮かべた。「あ、えっと、あの、仕事の話をしていたら、急に、ご依頼いただいた原稿でミスをしたくなって心配になってしまつて……でも、大丈夫でした！」

「そうか、ならよかつた。……それにしても、君とこれからの話ができるなんて嬉しいな。離れている間、ずっとこんな日を夢見ていたから」

孝弘の精悍せいけんな笑顔に、詩織は微笑みを返した。

——孝弘さんはこうやって、嬉しい、楽しみだつて言ってくれるけど……まあ、リップサービスよね。婚約者とはいえ、気を使わせて申し訳ないな。私、孝弘さんと違ってホントに地味だし。

内心ため息をつきつつ、詩織は背筋を伸ばす。

とにかく、今後の対処方法をしっかり考えなくては。

クールな孝弘のことだ。詩織との結婚に関してはおそらく『小早川家の次期当主としての義務だ』と割り切っているのだろう。

昔から孝弘に憧れ、好意を抱いてきた詩織としては少し寂しいが、彼はきつとどこに出しても恥ずかしくない夫としてきっちり振る舞ってくれるに決まっている。

そんなことよりも今考えるべきは、詩織の仕事をどう隠蔽いんぺいすべきかである。

この状況なら、おそらく誰もが『イケメン御曹司と結婚が決まったんだから、エロ小説家のほうは諦めれば？』とアドバイスするに違いない。だが、エロ小説家として軌道に乗った今となつては、どうしてもこの仕事をやめたくないのだ。

——ああ、でも、孝弘さんに自分の書いた話を読まれるなんて、絶対無理……。王子と姫と騎士が三人でエッチする小説なんか書いているところを見られたら……私はもちろん孝弘さんもショックで死ぬだろう……！

青くなつたり白くなつたりしている詩織を、孝弘が不安そうに見つめている。

詩織は内心の焦りを押し隠そうと無意味に笑みを浮かべた。

——でもやめたくない。小説家になつて本を出すのは、小さい頃からの夢だったんだもの……それに私、何を書いてもエロい恋愛小説になつてしまうから、ジャンル変更もできない……！

「実は、詩織のご両親には内々に話をさせていただけでいいんだ。うちの両親とも相談して、結納は来月にしようと考えているんだけど、いいかな」

「わ、わかりました」

孝弘の言葉に、詩織は頷いた。もう、外堀はガッチリと埋められているようだ。早く何とかして、仕事内容を隠す方法を考えなければならない。

——どうしよう……

きらきらと輝く桜色のダイヤを指に飾った詩織は、背中を伝う冷や汗を感じながら、今後の対策に思いを馳せるのだった。

第一章 政略結婚相手がなんだか不穏です

詩織が一人暮らしをしている家は、都内の高級住宅街にあるマンションである。

結婚前にどうしても一人暮らしをしたいと両親に主張した結果、父の持っていたこのマンションに住むよう言われたのだ。理由は、実家から徒歩五分であることと、マンション自体のセキュリティがしっかりしているからだ。

両親の監視つきの一人暮らしだが、実家で暮らすよりは断然良い。この場所なら、エッチな小説を思い切り書き殴れるというものだ。

思えば詩織は、物心ついた頃から読書の好きな子供だった。純文学もライトノベルも少女小説も、なんでも読んだ。厳しい両親も『漫画ではなく活字ならば……』と詩織の欲しがる本は全て買ってくれた。たとえその中に、こっそりエッチなシーンがあったとしても気づかずに。

かくして、小説の中に少しでもエロいシーンがあれば、そこを繰り返し読む子供だったおませな詩織は、今では立派なエロ小説家となった。

このように、詩織の興味の方向性は子供の頃から固定されていた。エロスの匂いがす

るものに惹かれる性分に生まれついたのでのかもしれない。

もちろん両親は詩織の嗜好を知らないし、知ったら多分泣くだろう。

「ううー！ 疲れた！」

あくびをしつつ、詩織は思い切り背中を伸ばした。ようやく原稿にエンドマークを打つことができたのだ。

時計は現在、明け方の四時を指している。

——お、終わった……推敲終わり。これで、初稿完成！ 忘れる前に担当さんに送っておこう。

詩織は原稿データをメールに添付し、出版社の担当さん宛てに送信する。

それからこたつの上に乗って伏して、バキバキ音を立てる肩を回した。

年中こたつテーブルで執筆しているのだが、どうも肩がこる。やはりパソコン用のデスクを買ったほうがいいのだろうか。しかしこたつで丸まって書いていると落ち着くのだ。

詩織は一つあくびをして、脱稿した満足感に身を委ねた。

——興味を持ってもらえるといいな。売れるといいな。

今回の小説もなかなか淫蕩な雰囲気仕上がった……と思っていたのだが、担当さんの反応はどうだろう。お眼鏡に合う内容になっていると良いのだが。

座りっぱなしだった身体は砂を詰めたように重たくなっている。

しばらくぼーっとこたつテーブルに乗って伏していた詩織だったが、慌てて起き上がった。

——いやいや、危なく寝るところだったわ。今日は孝弘さんとデートでしょ？ さつさとお風呂、お風呂……は、起きてからでいいや。

机で突っ伏して寝るのが癖なのである。悪い癖なので直さねばならないと思うのだが、集中から解放されたあとの睡魔に抗い難くて、いつも負けてしまう。

詩織はまっすぐベッドに向かった。眠すぎる。今お風呂に入ったらそのまま溺れちゃうだ。

こんなに荒んだ生活は、結婚したら無理だろう。

詩織はそう思いながら毛布にくるまって目を閉じた。

——次の締切は再来月だから、少し余裕がある……かな？

そう思いながらあつという間に眠ってしまった詩織は、電話の音で目を覚ました。

起き上がって、なんだろうと思いつつもスマートフォンを手取る。表示されている現在時刻と、電話の発信者の名前を見た瞬間、はっと我に返った。

「いけない！」

孝弘と約束していたのは十一時。そして今は十一時五分。着替えどころかお風呂にも

入っていない。真っ青になりながら、詩織は電話に出た。

「お、おはようございます」

情けないことに、数日の間、誰ともしゃべらずひたすら小説を書いていたので、うまく声が出ない。

『おはよう。待ち合わせ場所に来たんだけど、珍しく詩織が時間どおりに来ないから……どうしたの？ 声が嘎れてるけど……』

孝弘の心配そうな声に、全身から冷や汗が噴き出す。

——やばい！ 大寝坊した。

「あ、あの、ごめんなさい。私、今まだ家で……ちよつと昨日の夜遅くなっちゃって……。すぐお待たせしてしまいそうなので、約束は日を改めていただいてもいいですか？」

『えっ？ どういうこと？』

意外なほど驚いた声を出され、詩織は目を丸くした。

——あ、あれ？ 私、変なことを言ったかな？ 孝弘さんの時間が無駄になったら悪

いなど思っただけなんです。

そう思いつつ、詩織は電話口で孝弘の様子をうかがった。

「あの、昨日の夜遅かったので、寝坊してしまっただけです。ごめんなさい。お待たせす

るのが申し訳ないので今日は……」

『じゃあ、俺が今から詩織の家に行くよ。この前メールで教えてもらった住所だよね？』

そういえば、前回のデートでさりげなく聞かれて、何も考えずに教えてしまっていた。

『君は家で待っていてくれればいい。三十分くらいで迎えに行くから』

『いや、あの、それも申し訳ないので』

断ろうとした瞬間、電話は切れてしまった。……三十分後に孝弘が来てしまう。

時間がなくてまずいと焦っていたら、再び電話が鳴る。今度は母からだった。

——今度はお母様!? 忙しいのにな!

お風呂に入らなければと思いつつ、詩織は電話に出た。過保護な母は、電話に出ない限り何回もかけてくるのだ。無視するとあとが面倒くさい。

『もしもし、詩織。お母さんだけ。今度小早川さんのご家族と会食があるでしょう？』

いい帯が届いたから見にいらっしやう。若い子向きの可愛らしいお品よ』

「おはようございます、お母様」

予想どおり、のんきな話題であった。申し訳ないが相手にしている時間がない。

『まあ！ おはようございますって、もうお昼ですけれど。まさか貴方、今頃起きたのではないでしょうね』

母の声が詩織の挨拶を不機嫌そうに訂正する。四時に寝て十一時に起き、孝弘との

デートに寝坊したなどと知られたらさぞ怒られるだろう。母は節度ある清く正しい生活を娘に求めているのだ。

「忙しいの。疲れてるんだから仕方ないでしょう?」

「なんですか、その口の利き方は。貴方、一人暮らしを始めて生活が荒れたではありませんか?」

話が進まずいほうに転がっていく。そうでなくてもタイムリミットが近いのだ。詩織は慌ててしおらしい声を出して母に調子を合わせた。

「ごめんさい。私、昨日の夜中まで、お友達に頼まれた大事な仕事が終わらなくて、少し寝坊しちゃったんです。会食用の帯はお母様のセンスに任せるわ」

『あら、そうなの? お仕事が大変なのね。お友達に頼まれたことはきちんとささいね』

真面目に働いていることをアピールした結果、母の機嫌は若干回復したようだ。しかし、詩織と違い優雅な時間軸に生きている母に付き合っていると、時間がどれだけあっても足りない。

詩織は、これまで培った『対・実母戦術』を駆使して、なんとか話を終わらせることに成功した。

『…じゃあ、帯に合いそうな着物をいくつか出しておきますから、今度合わせにい

らっしゃい』

「わかりました。ありがとう、お母様。じゃあごきげんよう」

電話を切り、詩織はお風呂に飛び込んだ。鏡に映る顔はクマがひどく、元からの色白も相まって幽霊のようだ。

——私、日光に当たらなすぎかもしれない。化粧で誤魔化せるかな……

シャワーを浴び、髪と身体を熱心に洗って風呂場を出た。

せっかくのデートなので綺麗に着飾ろうと思っていたのだが、服を選ぶ余裕もない。

とにかくすぐ着られる服! いや、可愛い服……ああ、もうこれでいいや!

葛藤の末、詩織は『すぐ着られる服』を選んだ。

近所のショッピングモールのセールで買ったブラウン系の柄物ワンピースに、通販でまとめ買いした無地のストッキングを合わせる。髪を乾かし始めた瞬間、チャイムが鳴った。

——孝弘さん、もう来た! さすが五分前行動の人……!

濡れたボサボサの頭、しかもノーメイクのまま、詩織はよろよろとインターフォンに向かった。もっと身綺麗にしたかったのに、とほぞを嘔むが、寝坊した自分が悪いのだから仕方がない。

『俺だけ』

インターフォンのディスプレイには、孝弘の顔が映っている。時間切れだ。詩織は全てを諦め、エントランスのロックを開けて玄関に立った。

チャイムが鳴ると同時にドアを開ける。そこには、カーキのジャケットにデニム姿の孝弘がいた。

孝弘は人気俳優にも引けをとらないくらい格好いい。もう少し格好悪くしてくれないと自分に釣り合わないのでは……と詩織が不安に感じるほどだ。

普段のビジネススウェアと違うラフな格好も異様に似合っているし、特に整えずに下ろした髪もサマになっている。

胸がときめいた瞬間、思い出す。そういえば、今の自分は安売りのジャージー素材にワンピースをかぶっただけのすっぴんボサ髪だ。

詩織は微笑んでいる孝弘の前で、濡れた頭からそっとタオルを外した。

「うう、私ってどうしてこうなの……孝弘さんにこんなマヌケな姿見られたくなかったよ……」

泣きたい思いで、詩織は愛想よく笑みを浮かべた。

「こんにちは。ごめんなさい、遅刻した上に迎えに来ていただいて」

「いや、俺のほうこそ心配して押しかけてしまっただけ悪かった」

「心配？」

何の話だろうと首を傾げた詩織の前で、孝弘が笑みを浮かべた。

「いや、なんでもない。朝からお風呂に入ってたのか？」

「え、ええ……ちよつと……昨日入れなくって」

明け方まで必死にエッチな小説を書いていたのでお風呂に入りそびれました、なんて言えるわけもなく、詩織は曖昧に微笑む。

「……昨日の夜、何してたの？」

ふいに孝弘の声が低くなる。普段穏やかな彼の不機嫌さを感じ取り、詩織は驚いて目を丸くした。

「えっ？ どうしたんですか？」

「いや、ごめん。昨日の夜は何をしたのかなって気になっただけだよ」

詩織から目をそらして、孝弘が言った。その顔には、さっきまでのパーフェクトな笑みがない。

「まずい！ 待たせた上に、身支度もできていないから怒らせたのかも。どうしよう？」

内心身構える詩織に、孝弘が今気づいたというような口調で尋ねた。

「あれ？ 詩織、そういえば俺があげた指輪は？」

そう言われて、もらったエンゲージリングを金庫の中に入れたままだったことを思い

出す。

あんな最高級グレードのジュエリーは、普段使いなどするものではない。家事の最中に、万が一水回りで石が落ち、排水管にダイヤが流れてしまったら……と思うと恐ろしいのだ。お風呂に入るときならばなおさらだ。

「シャワーを浴びていたので外してたんです。今つけてきます。待っててください」
「そう……シャワー……」

微妙な反応に、詩織は当惑して孝弘の整った顔を見つめた。やはり彼の表情は曇ったままだ。一体どうしてしまったのだろう。

「……できれば指輪は普段からつけてほしいな。少なくとも婚約している間は」

孝弘の言葉に、詩織は慌てて頷いた。それもそうだ。せっかくプレゼントしてくれたのにつけないのでは、孝弘に失礼に当たるだろう。

「ごめんなさい。そうしますね。あの、支度をするので一階のカフェで待っていただきたいのですが？　すぐに行きますから」

「上がって待たせてもらっては駄目なのか？」

孝弘が、彼らしくもなく強引なことを申し出てきた。詩織は驚いて目を丸くする。

——ん？　孝弘さんてば、今日はホントどうしたんだろう？

家の上がりたい、なんて、いつもスマートで気遣い上手な彼らしくもない。

もちろん、笑顔で通したいところだが、孝弘を家上げるのは無理である。

なぜならば、濡れ場だらけの本が居間に散乱しているからだ。資料を調べるという名目で手当たり次第に読んでいたエッチな漫画や小説がその辺に堂々と広げている。孝弘の目に入ったらアウトだ。さらに言うと、締め切り明けの今日は部屋が散らかりすぎていて、どこにエロ本という名のアサシン（刺客）がひそんでいるのかわからない。

腕組みした孝弘の前で、詩織は首を横に振った。

「散らかってるのでちよつとダメなんです。髪を乾かしたらすぐに行きますから」

「わかった。じゃあ下で待つてるから。慌てずに落ち着いて支度しておいで」

孝弘が、気を取り直したように優しい笑みを浮かべる。

詩織はホッとして頷いた。不機嫌そうに見えたのは、多分気のせいだろう……

十分ほどで身支度を終え、詩織はマンシヨンの一階にあるカフェに走った。

「お待ちせしました！」

何かを考え込むような表情でコーヒーを飲んでいた孝弘が、顔を上げて微笑んだ。

「今日は映画でも行こうか？」

孝弘の提案に、特に不満もない詩織は素直に頷いた。

「詩織は何が見たい？」

「えっ？　私ですか？」

詩織が見たい映画は、やたらと爆発シーンが多くて、最後にエイリアンが退治されるような大規模予算投入系か、エッチなシーンのあるお子様NGの恋愛ものなのだが、どちらでも申し出るのは憚られた。

孝弘に『変わった趣味だ』と思われるたら恥ずかしい。詩織だって、一応乙女なのである。

「私はなんでもいいです」

「じゃあ、俺が見たい映画でいい？」

詩織は快く頷いた。孝弘が不快感なく過してきて、つつがなく時間が経過すれば問題ない。詩織が浮かれていつものマイペースぶりを発揮してしまったら、孝弘にあらわれてしまうかもしれない。

今までもずっと、詩織はそうやって彼に気を使ってきた。何しろ相手は小早川グループの御曹司である。詩織の迂闊な言動で婚約を破棄されでもしたら、迷惑が一族にまで及んでしまう。

孝弘も同じように詩織には気を使ってくれている。常に紳士的で、詩織を困らせることは一切しない。

だからこそ、五年前『どうしても海外赴任に詩織を連れていきたい』と主張されたときはちよっと驚いたけれど……あのときくらいだ。孝弘に強く何かを頼まれたのは。

——こういうのが、旧家の娘の結婚なんだろうな。淡々と結婚して、淡々と子供作って、家族や親戚に迷惑をかけないように家柄や財産を守って。私は……ちよっと寂しいけどね。

ふと考え込んだ詩織の前で、孝弘が首を傾げる。

「どうした？」

「あ、い、いえ、コーヒー飲んだら映画に行きましようか。ちよっと待ってください」

慌てて愛想笑いを浮かべた詩織の前で、孝弘が表情を曇らせた。

「詩織は俺が日本に帰ってきて、嬉しくなかった？」

突然の意外すぎる台詞に、詩織は目を丸くした。

——嬉しくなかった……って、どういう意味？

「そ、そんなこと、ないですけど」

頭の中が真っ白になってしまい、詩織はつつかえつつかえ答えた。嬉しかったに決まっている。婚約者が帰ってきたのだから。

「なんか、プロポーズした日も今日も、俺が何を言っても上の空だから。俺なりに張り切って君をエスコートしたり、指輪を選んだりしてるんだけど」

その台詞に、詩織の顔から笑みが消えた。

孝弘の顔がとて真剣だったからだ。笑って流せるような雰囲気ではない。

「ごめん。詩織を困らせるつもりじゃないんだ」

表情を凍りつかせた詩織に、孝弘が取り繕ったように微笑みかける。

「それを飲み終えたら、映画に行こうか」

いつもどおりの優しい声に、詩織はおずおずと頷いた。

孝弘の言うとおり、確かに上の空だったかもしれない。しかしそれは、日々書き殴っているエッチな小説を孝弘に隠したいとか、結婚したらエロ本や仕事をどうしようとか、余計なことばかり考えているからであって、彼と一緒にいるのが嫌だからではないのだ。

——私がエロ小説家でなければ、孝弘さんに変な心配を抱かせることもなかったのかも。

そんなことを思いつつ、詩織はカップを置いて孝弘に深々と頭を下げた。

「ごめんなさい」

突然謝られて驚いたのか、孝弘が目を見張る。

「詩織？」

「孝弘さんの仰るとおりです。私、頭の中が毎日仕事のことについてばいなんです。今日も四時まで仕事をしていて、思い切り寝坊しました。上の空で本当にごめんなさい」

恐る恐る顔を上げると、孝弘は驚いた表情のまま、コーヒーカップを手に詩織を見つめていた。

何か変なことを言っただろうか。そう思いながら、詩織は続ける。

「指輪も、うちの母でさえ持っていないようなすごいダイヤだったし……下水に流したら取り返しがつかないので、普段はつけていないだけなんです」

そう言った瞬間、孝弘が嘔き出した。

——な、なんで笑うの？

驚く詩織の前で、孝弘が笑いを収めようと肩を震わせながら呟いた。

「げ、下水に流すって、君ね」

「だって下水に流したら大惨事だと思っんです。そんなことになったら、下水管を開けてもらって溝さらいをしないと探せないし」

孝弘は片手で顔を覆って笑いをこらえている。

——私、また余計なことを言ったんだな……

様子をうかがう詩織の前で涙を拭い、孝弘が明るい表情で言った。

「いや、笑ってごめん。そんな理由で指輪を外していたのか。君は今も昔も変わらないいな」

孝弘の表情はすっかり緩んでいた。さっきまでの妙に不機嫌そうな陰りは消えている。それにしても『今も昔も変わらない』とはどういう意味だろう。

——私、何かしたっけ？

詩織は首を傾げた。おそらく、考えるまでもなく、何か余計なことをしたのだろう。思い出さなくてもいいような気がする。いや、思い出さないほうがいい。必死に暗黒の記憶を封印しようとする詩織の脳内に、孝弘の前でしかした数々の失敗が蘇る。

中学の頃、学校帰りに孝弘と待ち合わせし、階段の下にいる彼に駆け寄ろうとして、制服のスカートからパンツ丸出しで転げ落ちたこと。

高校の頃、文化祭に孝弘を呼び、クラスメイトに強引に着せられた大根の着ぐるみ姿で入場ゲートに迎えに行ったこと。

それから、短大入学のお祝いにもらったパステルカラーのジュエリーに対して『餽み』あめたいで、おもしろい』とつい余計なコメントをしてしまったこと……

どのときも、孝弘は王子様のような顔に驚愕の表情を浮かべて凍りついたり、あるいは大笑いしたりしていた。

恥ずかしすぎて思い出したくない。ついでに孝弘の余計な記憶も消したくなってきた。「本当に、顔に似合わず面白いな、君は。美人だし、申し分のないご嬢なのにね……」

「あ、あの、すみません。女らしくないって母に叱られているんです、私」

そう言うのと同時に、お正月の親戚の集いで耳にした、歳の近い従姉の文句が脳裏を過った。

『なんで詩織ちゃんが小早川さんの婚約者になれたの？ 本家のお嬢様だからって優遇されすぎ！ あの子、そんな柄じゃないじゃない！』

確かにそのとおりだ。親の立場的には釣り合っているとはいえ、なぜドジで平凡な詩織が……と思う人は多いだろう。

「でも俺は詩織といると楽しいけど」
孝弘の明るい声に、落ち込みかけていた詩織は顔を上げた。

「取り澄ましたお嬢様より自由な君のほうがずっと好ましい。面白くて」

「あ、あの、面白いつて褒め言葉ですか？」
びっくり箱みたいで、ある意味意外性はあるのかもしれないが、孝弘はそれでいいの
だろうか。

内心冷や汗だくだくの詩織に笑いかけ、孝弘はジャケットを手に立ち上がった。
「俺にとっては褒め言葉だよ。……さ、映画館に行こう」

そう言った孝弘は、ひどく機嫌の良さそうな表情をしていた。

映画を見終わり、詩織は孝弘と二人で初夏の街を歩いていた。

カフェやギャラリ、ブティックの並ぶ美しい街並みには好奇心をそえられるが、詩織はさつきから落ち着かない気分だ。

「な、なんで今日は手を繋ぐ……のかな……?」
 すたすた歩いて行く孝弘は、なぜか映画館を出てから、詩織の手をしつかり握ったままだった。

紳士である孝弘は、今まで一度も詩織に触れたりしなかったのに……一体どのような気持ちの変化が起きたのだろうか。もちろん嫌な気分ではないが、非常に落ち着かない。道行く人が孝弘をじっと見ている。シャープで端正な顔立ちに、まっすぐに伸びた背中。清潔感に溢れた美貌の彼は非常に人目を引く。

ちなみに、三千九百円のジャージー素材のワンピースを着た凡人の詩織には、誰一人として注目していない。人の視線は正直だなと思う。

「ああ、いくらラクチンだからって、こんな服買っただけよ……それに今更だけど、この柄、ミノムシみたいじゃない? 茶色だから使い回しが利くって言われたけど、ミノムシっぽいよね?」

気づいてしまったが最後、『私のワンピースはミノムシ柄』ということしか考えられなくなってきた。

しかも、相変わらず孝弘の手は詩織の手を握ったままだ。意識したら、ますますドキドキしてしまう。

「だ、だめだ、混乱してきた! 緊張する、どうしよう。」

「詩織」

「ハッ、ハイッ!」

詩織は上ずった声で答えた。自分の顔が真っ赤なのはわかってる。昔からの婚約者とはいえ、これほどのイケメンに手を繋がれて赤くならずにいられるものか。少なくとも凡人の詩織には無理だ。

詩織の、『私、ずっと地味子で男性と縁なんてありませんでした! 今、舞い上がってます!』と丸わりの態度がおかしいのか、孝弘がくすつと笑った。

「どうしたの? 手を繋ぐのは嫌?」

「い、イイエ、あの、イイエ、あの……」

悲しいかな、日本語すら出てこない。

そのとき、口をバクバクさせている詩織の手を孝弘が軽く引き、身体を抱き寄せた。

「え……っ?」

見た目よりもたくましい身体感触に頭の中が真っ白になる。同時に、自転車に乗った子供がすごい勢いで二人の脇を通り過ぎていった。

子供を見送った孝弘の腕の力が緩む。

「あの子、危ないね。この辺の歩道は狭いのに」

びっくりするくらい間近に孝弘の顔がある。詩織は真っ赤な顔のままぎこちなくお礼

を言った。

「あ、あ、ありがとうございます」

顔が熱い。真っ赤になってるのが自分でもわかる。

毎日あんなにエロい小説を書き殴っているのに、現実の詩織は男性と接触したことなどほとんどなく、婚約者に触れられただけで舞い上がって汗だくになっているのだ。我ながら情けない。

——そ、そうだ、場を和ませよう、何か、こう、なにか世間話を……世間話をするんだ！

空回りしていることを自覚しつつ、詩織は孝弘を見上げた。

「あ、あの、な、なんか、私の服、ミノムシみたいじゃないですか？」

「は？」

孝弘が詩織の唐突な言葉に目を丸くする。

「いえ、あの、お店の人に『ブラウンベースのモザイク風の柄だから使いやすいですよ』って言われたんですけど、なんか、ミノムシに似てるなって気づいちゃって」

孝弘がびつくりした顔のまま、詩織の着ているワンピースに目をやった。

……沈黙が痛い。余計なことを言わなければよかった。

詩織は、そっと孝弘から目をそらす。

——私……なんでこうなのかな……日に日に好感度をダウンさせているような……とほほ。

ガツクリと落ち込んだ詩織の頭に、ふいに孝弘の手が乗せられた。

「君は今日の服が気に入らないんだな。わかったよ。プレゼントする」

孝弘の肩は、笑いをこらえようとして震えていた。

………って！ 孝弘さんがまた死にそうなくらい笑ってる………！

「あの店はどうかな」

詩織の肩を抱いて、孝弘が高級ブランド店を指差す。

「ち！ 違います！ すみません。服を買ってほしいという意味じゃないんです！」

「いや、たまには詩織の服も見立ててみたい。アメリカでいつも考えてたんだ。君と結婚したらああしよう、こうしようって、色々」と

「ちよっ、待っ………！」

なぜか非常に機嫌のいい孝弘に引っ張られ、詩織は隠れ家サロンのようなお店に連れていかれてしまった。休日の昼間だというのに店の中にはあまり人がいない。ダウンライトで照らされたマネキンが着ている服は夏物の薄いワンピースだが、控えめに置かれた値段表を目にして詩織はぎょっとなった。

——高すぎる。この服一枚で私のミノムシが何匹買えるのかな。

実家を出たあと、親の持つマンションに住むことで家賃だけは無料にってもらっているものの、それ以外の生活費は詩織が自分で賄^{まかな}っている。

それが、一人暮らしにあたって両親が出してきた条件だったからだ。

おそらく両親は、多少苦労させれば、お嬢様育ちの詩織など、すぐに音^ねを上げて戻ってくると思っていたのだろう。エロ小説家の仕事に挫折^{ざせつ}しない限り、戻る気はないのだが。

そんなわけで、詩織はあまりお金がないのだ。ブランド物も自分では買わない。

「いらつしやいませ」

笑顔で迎える店員に、孝弘が落ち着き払った口調で告げた。

「彼女の服をひととおり見立ててもらえますか」

「かしこまりました」

詩織は、店員に愛想笑いを返した。こんな場所で、服を買う買わないと押し問答するのは恥ずかしい。

——試着して、今日はいらなくて言えばいいわ。

何着かワンピースを持ってきた店員は、詩織の靴を一瞥^{いちべつ}すると、笑顔でノースリーブの赤みを帯びたオレンジのワンピースを差し出してきた。

そういうえば今履^はいているパンプスは、母に押し付けられたどこぞのブランド品なのだ。

「お連れ様にはこちらがよろしいかと。いかがでしょうか？」

光の加減で赤みの濃くなるワンピースは、蕩^{とよ}けるような手触りだった。

布自体にグラデーションがかかっているので、単色でも非常に美しく見える。さらに、カッティングが絶妙なのだろう、『このワンピースには余計な装飾など不要だ』と思えるデザインだ。

——綺麗な服……でもオレンジ色なんて派手だよね。どうしよう、一応着るだけ着てみようかな。店員さんは自信満々オススメです！ って感じだし。

好奇心に駆られた詩織は、そのワンピースを受け取って着替えてみた。

気おくれしつつもワンピースに袖を通した詩織は、思わずまじまじと鏡を覗^{のぞ}き込む。地味で色白^{しろ}とは思っていないかった自分が、まるで洗練された淑女^{しよふ}のように見えた。

「孝弘さん！」

試着室から出て、弾んだ声で孝弘を呼ぶ。

まさか自分がオレンジ色を着こなせるとは思わなかった。ぜひ彼にも見てほしい。

「すごいです。こんなに明るい色なのに私でも着られました！」

「へえ、似合うな」

感動のあまりはしゃいだ口調になってしまった詩織を見つめ、孝弘が満足げに腕を組んだ。

「そちらのお靴にも合うのではないかと思ひまして」

詩織のページジュのパンプスを示し、店員がそう言い添えると、孝弘はすぐに頷いた。「そうですね。よく似合ってる。ではこのワンピースを頂けますか」

即決され、詩織は慌てた。別に買ってほしくて試着してみせたわけではないのだが。しかし口バクで『いりません』と訴えたのに、孝弘には綺麗に無視されてしまった。「かしこまりました。お客様、合わせてこちらなどいかがでしょう」

笑顔の店員が今度は大ぶりのネックレスを差し出してくる。

「お召しのワンピースとのシリーズとして、デザイナーが提案したものなんですよ」

胸のところに、アンティーク調のネックレスをあてがわれ、詩織はなるほど納得しってしまった。

——確かにすごく合う。金古美きんこるびっぽい金具がこの色にぴったり。この螺鈿らでんみたいなパーツもいいな。

「じゃ、それもください」

詩織の姿をひと目見た孝弘が、再びあっさりとオーダーした。

動転し、詩織は孝弘の顔を見上げる。

——孝弘さん、待って……あの……値札見えます……？

合計すると、詩織の書くエロ小説一冊分の印税が吹っ飛ぶほどの値段になっている気

がするのだが。

「このまま着て出かけたいんですけど」

孝弘の言葉に、店員が心得ているというように頷いた。

「かしこまりました。ご準備いたします。……お客様、こちらはいかがなございますか」

店員が、詩織に、いかにも高級インポート物と思われるストッキングを差し出した。

『うちの服に通販の一足五十円のストッキングを合わせるな』という意味だろう。

——デスヨネ……脚に色が合っていないですもんね！

詩織はそれを無言で受け取った。さすが、プロの販売員の目は誤魔化せない。

「何か上に羽織るものもお見立てしましょうか。こちらのカーディガンですと冷房よけにいいですし、ワンピースの上に羽織ると可愛いですよ」

次に店員が持ってきたのは、パンプスと色調のよく似た薄手のカーディガンだった。

若い女性向けらしく、身ごろに小さな花が縫い付けられていて、品があるのに可愛らしい。

——か、可愛いけど……これ以上はいいです！ ン万円の冷房よけはいらないます。ノースリーブでも気合で乗り切ります。

内心全力で拒絶する詩織の傍らで、孝弘があっさり言った。

「じゃ、それもください」

「ありがとうございます」

孝弘からクレジットカードを受け取った店員がレジに向かったあと、詩織は彼にそつと耳打ちした。

「あの、孝弘さん……いりません、こんな高い服。この間指輪も頂いたのに」

「似合うんだから構わないだろう？ 五年も離れ離れだったんだし、少しくらいプレゼントさせてほしい」

孝弘は優雅な美貌に似合わず、意外と頑固なのだ。だがやはりこんな高価なプレゼントは詩織としても困ってしまう。

——断っても、絶対にプレゼントしてくれるんだろうな。はあ、どうしよう。婚約者の財力に、こういう意味で悩む日が来るとは……

詩織は孝弘に翻意ほんいさせるのを諦めた。店員に連れられてもう一度試着室に入り、外に行けるように服を整え直して、孝弘の前に立つ。

「いいね、すごく綺麗だ」

「綺麗……ですか？」

詩織は思わず穿はき替えたばかりのストッキングを見下ろした。

——確かに、こんなに綺麗なストッキング初めて穿はくかも。

じっと自分の脚を見ている詩織がおかしかったのか、決済のサインを終えた孝弘が立

ち上がり、詩織のほうに腕を差し出して微笑んだ。

「どこを見てるの？ 綺麗だって言ったのは君のことだよ」

澄んだ茶色の目には、からかうような光が浮かんでいる。

ストレートに褒められてどんな顔をしていいのかわからず、詩織はおろおろしながら、差し出された彼の腕に指をかけた。

「あああ、あの、ありがとうございます……」

やっぱり、孝弘とこんなふうに寄り添うのは落ち着かない。婚約指輪を受け取ってからというもの、彼との距離が近くなったように感じるのは気のせいだろうか。

「これからは俺の見立てたものも身につけてほしいな。せっかく詩織は綺麗なんだし」

「い、いや、私は別に、綺麗では……」

ドキドキしすぎて、変な汗が出てきた。なぜ、急にたくさん贈り物をされて、恋人同士みたいに密着されるのだろうか。嫌ではないのだが、緊張してしまう。

「綺麗だよ。君はそういう自覚がないところがいけない……ちょっと不安になるな」

店を出て歩きながら、孝弘が呟いた。

「いえ、そんな……そう言っていただけるのは嬉しいんですけど」

詩織は首を横に振った。素材は母譲りなので多少ましかもしれないが、中身が若干、いや、相当残念な女だという自覚はある。

母からの『何なの貴方は！ 品がない！』というダメ出しや、親戚の女の子達の、きつちりメイクをし、ブランド物で固めた美しい姿を思い浮かべると、自分はどうも劣っている気がしてならないのだ。

詩織が孝弘に大事にしてもらえないのは、たまたま生まれた家柄が良く、たまたま彼の婚約者に選ばれたからだ。

それがわかっているのです、こうやってお世辞を言ってもらえて嬉しい半面、申し訳ないとも思ってしまう。

——釣り合っていないのは、わかっているんだよなあ……

孝弘に悟られないよう、小さくため息をついたとき、孝弘がふいに口調を変えて言った。

「詩織、俺は本気で褒めてるんだよ」

孝弘が真剣な顔で詩織を見ている。街路樹の木漏れ日が彼の端整な顔に淡い影をまだらに落とし、彼の茶色の目を琥珀色に輝かせていた。

笑って誤魔化そうとした詩織の顔から、笑みが引いていく。

「え、えっと、あの」

「五年前、海外赴任が決まって、君をアメリカに連れて行きたいと言ったときも、俺は本気だった。どうしても君と離れたくなかったんだ。でも、君自身に断られてわかった

んだよ。俺が頼りないから受け入れてもらえないんだってことが」

——えっ？ 突然、何の話？

目が点になってしまった詩織を置き去りにして、孝弘が話を続ける。

「だから俺は、詩織に信頼してもらえろ一流の男を目指して頑張ったつもりだ。父や叔父さんに言われた以上の結果を出すため、赴任期間が延びてもアメリカに残ってね。そのおかげでそれなりに評価されるようになったし、成長もしたと思う」

孝弘が有能なビジネスマンなのは知っている。実家に帰ったときに父からさんざん聞かされた。むしろ『孝弘くん釣り合うようお前もしっかりしろ』と櫓を飛ばされたほどだ。

——い、いや、あの、違います。私、もつとしょうもない理由で、あのとき結婚を断って……

詩織の背中を汗が一筋伝った。何か誤解が生じているような気がする。

「今もそうなんだろう。君の全てを委ねるには俺が頼りないんだよな、詩織」

「い、いや、孝弘さんに全てを委ねようなんて思っていないですよ。私も一応働いてるんですから」

しどろもどろになった詩織の顔を覗き込み、孝弘は低い声で言った。

「そうだね。君が言いたいことはわかる。君は、俺がいなくてもいつも満たされていて